



小規模専門図書館における図書館システムの検討

有園 博子
田中 友恵

I. はじめに

今回われわれは、精神医学・心理学系の専門図書館システムの新規構築に携わった経験から、小規模施設における専門図書館(図書室)が求められる機能と限界、運用の問題点などについて考えてみたい。

兵庫県こころのケアセンターは、1995年の阪神・淡路大震災を契機として、災害や事件・事故・犯罪被害・虐待・DVなどによって引き起こされるトラウマ(心的外傷)やPTSD(心的外傷後ストレス障害)の研究・診療・相談活動および専門家研修を行う全国初の拠点施設として、2004年4月に神戸に開設された。診療部門(精神科外来のみ)を併設しており、研究部門と診療部門は兼任で、所属構成員は研究員(精神科医、臨床心理士)計11名である。図書関係担当職員としては、図書館司書1名(非常勤)、図書委員1名(主任研究員兼任:筆者)、外部委託派遣職員1名(非常勤:主に書誌登録作業を担当)である。

大規模総合病院や総合大学などでは独立して図書館部門が設置されていることが多いが、当センターでは小規模のため研究部内に研究資料室を併設する形をとった。開設直後より一貫した蔵書装備・図書管理システム化を目指して図書管理ソフト(OPAC:丸善「校倉」)を導入し、研究員個々のPC端末から利用できるように整備を進めてきた。また、事業報告書とは別

に研究部発行の紀要である『心的トラウマ研究』を創刊し、現在、ISSNを取得し、医中誌Webに収録されている。

II. 研究資料室の特殊性

研究資料室で扱う資料は、「トラウマ」「PTSD」「こころのケア」に関するものが中心となっている。トラウマに関する研究領域は新しい分野であり、アメリカでは1980年代から、日本では1995年から研究がなされている。このため、研究領域の特徴としては、①多彩な学問領域と関連していること(既存の専門分野では、精神医学・臨床心理学・社会科学・法学・人類学などに該当する)、②トラウマ専門治療や調査研究のためには、常に新しい情報が必要とされること、③既存の学問分野には含まれない分野の資料収集も必要とされること(各種団体発行の報告書、パンフレットなど)、この3点があげられる。

したがって、研究資料室の機能としては、多彩な領域をカバーできる資料収集機能と最新の研究論文情報入手機能を持たせることが必須条件であった。

III. 求められた図書館システム機能

石川によると、図書館システムに求められる機能として、①適切な資料の収集と管理、②効率的・効果的な資料提供の機能と場面、この両方の機能を併せ持つシステムが図書館システムであるとしている¹⁾。また、近年図書館システムは従来の図書館員のための業務用システムか

ありぞの ひろこ:兵庫県こころのケアセンター 研究部
e-mail:arizono@j-hits.org

ら、利用者のためのアクセス支援環境としての図書館システムへと変化してきているともいわれている²⁾。

われわれの小規模専門図書館に求められた図書館システム機能は「まさしく従来の紙メディアのみではない、ネットワーク情報資源との統合管理、目録から一次情報への直接リンクなど、情報資源へのアクセス支援のためのシステム²⁾」であった。

ところが、筆者にとって図書館学 (Library Science) は専門外であるため、上記の特殊性を考慮して新規に図書館システムを立ち上げるに際しては、図書館学の専門知識を持った図書館司書とユーザー代表としての図書委員との共同作業が必須であった³⁾。

1. 書誌データ管理

現在の所蔵資料としては、蔵書約4,500冊 (個人寄贈書籍含む)。また、阪神淡路大震災関連の「震災文庫」約300冊) 海外雑誌29タイトル、和雑誌19タイトル、この他に各種報告書などの資料を保管している。前述のⅡに示すように、所蔵内容が多様な分野に渡るため、蔵書書誌分類は NLMC (医学系中心)・NDC の2分類を採用した。

図書館管理システム構築に際して特に苦慮した点は、より効率的に所蔵資料の中から必要資料 (書籍・論文・報告書など) を入手できることであった。そのため、図書館管理システム (Web OPAC) 導入時には、通常の蔵書管理機能に加えて、雑誌タイトル単位だけではなく掲載論文単位での検索が可能となるようにすることが求められた。導入した Web OPAC には、所蔵雑誌のコンテンツまでの二次情報を入力することで、ミニデータベース的な機能を持たせようと企図し、現在一部ではあるが使用可能な状態にある。

2. 電子媒体資料

また、最新論文情報入手のために⁴⁾ 外部の電子資料 [有科学術データベースやポータルサイト : 日本語 1 サイト (医中誌)、英語 4 サイト

(Cochrane Library、PsycINFO、ScienceDirect、Ovid)、有料オンラインジャーナル海外サイト数社、他無料サイト (PubMed、BibliLine PILOTS Database—National Center for PTSD、各種検索サイト、データベースサイトなど)] を使用している。外部有料ポータルサイトが提供している機能を生かして当センター研究部の Web OPAC とのリンクを行った結果、すべてではないが外部電子資料で検索した論文がセンターの研究資料室に所蔵されているかどうかコマンドボタン一つで判る機能を持たせることが可能となった。

3. ILL (Interlibrary Loan : 図書館間相互協力)

外部への文献複写依頼は、近畿病院図書協議会に加盟できたことで、ようやく安価に利用できるようになった。

Ⅳ. 課題

以上は、大規模図書館なら当然の機能であるかもしれない。しかし、小規模図書館において、果たしてどこまで研究者にとって利便性の高い機能を持たせることができるかということは、予算の制限もあり非常に難しい問題を抱えている。現状では、必要最小限と考えられた基本機能をなんとかそろえたところまで来たと思う。

今後の課題としては、大きく分けて機能・技術面と維持運用・保守面での2つの課題があると思われる。

1. 機能・技術面での課題

- 利用環境の整備 : サーバー管理、電子媒体資料の管理
- 書誌分類を NLMC (医学系中心)・NDC の2分類採用したことに伴う配架上の工夫が必要になったこと
- 英語文献は入手しやすいが、日本語文献が入手しにくいこと。J-STAGE などを利用したとしても、医学系以外の分野 (心理学系など) の日本語資料収集には、かなりの困難性を感じる現状にある。種々の難しい問題が山積しているとは思いますが、日本でも関連分野学会で

の学術情報発信の方法を考える時期に来ているのではないだろうか⁵⁾

2. 維持運用・保守面での課題

(1) 情報資料入手に関する課題

- ポータルサイト、オンラインジャーナル、などの電子媒体資料の購入費用
- 現在、研究上は書籍よりも論文が主体となっていることの特長
- 以上を経理担当者に理解してもらうことの必要性

(2) 専門人材に関する課題

- 電子媒体資料管理に関する図書館業務ができる人材（購入契約-資料の受け入れ-整理-精算-利用、閲覧登録と管理・ジャーナルタイトル管理・リンク先 URL 管理・パッケージ変更への対応など）⁴⁾
- 図書館システム運用（上記項目など）とサービス（利用者教育、レファレンスサーチ業務など）が可能な人材
- 現状維持にも図書館業務を行なう相当程度の作業量と作業時間数を必要とする

(3) 上記(1)(2)の両方に関する課題

- 相互貸借（＝外部文献複写依頼）業務量の減少と外部電子資料購入とのバランスの適正化の検討
- ユーザー（研究員）は必ずしも図書館学に関する専門知識を持っているわけではないため、図書館司書が一定期間不在になった場合、業務継続をどうするのか
- 各種図書業務の分担遂行や、意思決定事項を誰が担うのが最も効率が良いかの検討
- 外部公開（近年の患者図書館の流れ）を想定した場合に、当センターでの将来的な機能として、地域の専門家への専門情報の提供（資料閲覧・検索）が考えられるが、こ

れをどう設計していくのか

上記の課題については、組織としての理解が不可欠と思われる。

V. おわりに

今回、専門図書館開設にかかわり、図書館システム機能の充実と専門知識を持った図書館司書の存在が、研究者にとっていかに必要不可欠なものであるかを実感した。大規模図書館での情報検索・入手機能にははるかにおよびないが、小規模であっても必要最小限の機能を持たせることで専門研究を支えることが可能であると考えている。

参考文献

- 1) 石川徹也. 図書館システムの機能. 情報の科学と技術 2002 : 52 (9) ; 449-54.
- 2) 宇陀則彦. システムライブラリアンをめぐる状況と課題. 情報の科学と技術 2006 : 56 (4) ; 150-4.
- 3) 中尾康朗, 永井善一. サービス思考環境下におけるシステムライブラリアンの役割とスキル. 情報の科学と技術 2006 : 56 (4) ; 155-60.
- 4) 石川正, 羽原正, 大島健志. 電子ジャーナル導入による外国雑誌の利用動向の変化 (日本原子力研究所の場合). 情報の科学と技術 2004 : 54 (3) ; 126-32.
- 5) 林和弘, 門條司. 日本化学学会での学術情報発信と流通. 情報の科学と技術 2003 : 53 (4) ; 441-7.
- 6) 緒方良彦編. インデックス その作り方・使い方—データベース社会のキー・テクノロジー. 東京: 産業能率大学出版部; 1986.
- 7) 川崎義孝編. 大学生と「情報の活用」情報探索入門. 第3版. 東京: 日本図書協会; 2000.